

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2490300015		
法人名	有限会メーサーサービス		
事業所名	グループホーム 楽家生		
所在地	〒513-0816 三重県鈴鹿市南玉垣町5470番地		
自己評価作成日	平成28年10月10日	評価結果市町提出日	平成28年12月27日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaijokensaku.jp/24/index.php?action=kouhyou_detail_2016_022_kani=true&JigyosyoCd=2490300015-00&PrefCd=24&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	BERシステムズ株式会社		
所在地	三重県 四日市市 八王子町 439-1		
訪問調査日	平成 28 年 10 月 26 日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

・経験年数のあるなしにかかわらず介護の知識や技術は自己研鑽に励んでいるところですが、礼儀や常識をわきまえた、やさしい声かけができる職員がそろっています。

・正看護師を配置しており、看護師の視点による健康状態の把握や利用者の重度化への対応を行っています。

・看取りの支援に力を入れた取り組みを行っています。最期まで住み慣れた場所と顔なじみの職員・仲間の方に見守られ、心安らかにいてほしいと願っています。朝にはカーテンを開け陽の光を取り入れ、湿度や温度調整の整備や周りの声が部屋に入るようドアを開けたり、好きだった音楽をかけたりなど、住空間の整備に努めています。朝のあいさつや日中の話しかけ、夜のおやすみなど、職員からの働きかけにも配慮した取り組みを行っています。また、家族様の精神的なフォローにも力を入れています。

・できる限り家庭に近い環境整備を整え、ゆったりと安心して毎日が送れるよう支援させていただいております。外出や行事を通し季節の移り変わりを実感していただいたり、ボランティアさんや地域の方とのつながりも大切にさせていただいております。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

・楽家生の職員は所長の考えに賛同し「家ならどうか？」を判断基準に、笑顔で心掛け穏やかな支援に取り組んでいる。入浴は、基本週3回だが希望者にはそれ以上も対応できている。また、職員が毎月利用者の身体、精神、社会面の様子及び医療情報を手紙にして家族に送り、好評を得ている。

・地域との交流が密で、自治会が楽家生利用者のために地域行事に参加できるよう色々工夫を凝らしてくれたり、子供神輿をホーム経由とし、利用者と子供たちとの触合いの場を提供してくれたり、利用者が楽しく地域と交流できている。

・正看護師がおり、掛りつけ医以外の受診や健康診断も看護師が積極的に通院支援をしている。また、複数の看取りが重なっても、家に近い状態での看取り方針で都度頻繁に家族と話し合いながら看護師、職員一丸となって取り組んでいる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念は掲示しているが、理念が浸透しているとは言えない。特に理念について唱和するようなことはせず、日常の仕事の中とか、会議で運営方針にかかる話をするとき理念についての考えを職員に話している。	職員は、理念の精神を「自宅生活の延長」と捉え、夕飯やお風呂の時刻、使用する食器等、できるだけ家での生活に近づくようにと、利用者主体の考えでの対応を心掛けている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の年間行事である夏祭り、運動会はパン食い競争や踊りに参加させて貰っている。子供神輿は楽家生を經由してくれるので、毎年直接、子供たちにおひねりやプレゼントを渡すのを楽しみにしおられる。	運営推進会議を通じ自治会長とも密な関係ができているためか地域行事では、色々利用者のために特別な計らいをして貰っている。また、来月は、健康教室の場を提供する予定があり地域との良い関係を築いている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	利用者の状況や活動報告をし、それに関し出席者から意見をいただいている。また自治会からは、今後の行事予定の情報もいただいております、積極的に参加している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議は、2か月に1度開催しており、活動報告や意見交換を行い、サービス向上に活かしている。また自治会からは、今後の行事予定の情報もいただいております、積極的に参加している。	利用者代表も参加メンバーで、発言の機会がある。また、参加可能な会議日時のアンケートをとるなど、参加者の確保に努めている。相模原殺傷事件の後では、防犯カメラについて意見交換があり、事業所でも2個設置した。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	毎月1回、市の相談員を受け入れている。生き生きボランティアも数名受け入れている。市へは管理者が関係書類の提出に出かけ会話する機会を得ているほか、所長も多くの関係者と情報を交換している。	運営推進会議に毎回出席してくれる包括支援センター職員と密に情報交換をしている。また、市の事業である生き生きボランティアや相談員の受け入れ等を積極的に行っている	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	夜間を除き、見守り体制が行き届く時間帯には日中は施錠しない介護を行っている。また、言葉による拘束にも注意し申し送り等で伝えている。	事業所内研修を行っている。利用者の安全上、四点柵を余儀なくされた時は、計画を立案し、家族の同意書を得、記録を実施している。車いすでの拘束を安易に行わないために、職員はよく注意して「ずれ」を頻りに直している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	利用者の訴え、身体の状態を観察し、早期に発見できるよう、注意している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	実際に利用している人はいないが、学ぶ機会を持っていない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約前の実地調査の時に管理者が同行し本人や家族の思いを受け止め、不安の解消に努めている。書面契約については所長から詳しく説明を行い、理解を促している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	出入りに意見箱を設置している。家族面会時には、必ず代表者・管理者が顔を合わせ、意見要望を聞けるように心がけている。	家族面会時に顔を合わせて、話ができるよう対応しているが、家族としては話しにくいこともあると思われるため、施設としては今回の家族アンケートの結果を見て要望を吸い上げたいと考えている。買い物や通院等、職員は時間を工面して要望に応えている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日常の仕事の中や会議で意見を吸い上げており、主にケア関係は管理者が、運営関係は所長が受け止めている。良い意見はどんどん運営に反映させているが、今後も職員の意見や提案を受け入れていきたい。	最近では、2名同時に看取りがあり人手不足での困窮を訴えたところ、すぐに職員を募集し、看護職員が看護に専念出来るよう配慮したり、また職員の調理等の負担を減らし支援に専念できるよう業務を採配したりと、前向きに取り組んでいる。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	管理者から職員の状況を代表者に伝えている。また、代表者自ら個別の相談に応じている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	事業所内外の研修は十分とは言えない。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	小規模事業所が集まり、年1回の作品展を開催している。そこで交流する機会を設けているが、それ以外の取り組みまでは行えていない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	毎日の行動、言動からどのような支援が必要か考え、信頼関係を築けるようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	施設見学をして頂き、不安なことや要望等を伺っている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人、家族との面談の中での確にニーズを捉え、入居による環境の変化による不安や戸惑いなどを考慮し、支援に当たれるよう心掛けている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	言葉の表出が難しい方についても、しぐさや表情など非言語的コミュニケーションで気持ちを読み取るようにしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	誕生会や行事などへの参加を呼びかけ、本人と家族との関係が維持できるよう心掛けている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	手紙や年賀状等を通じて以前の関係が維持できるよう支援している。また馴染みの方が訪問された時は本人のエピソードを聞いたりしている。馴染みの美容院に出かける利用者もいる。	継続した馴染みの支援ができるように、個別表に利用者の写真を中心にセンター方式で調べた「馴染み」を吹き出して記入しファイリングしている。また、毎月訪問してくれる傾聴ボランティアとの交流の深まりが新たな馴染み関係を構築している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	日常生活の中で入居者同士が声を掛け合ったりすることもある。レクリエーション、行事などで、お互いが関わり合いを持てるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	相談がある場合は対応し、関係が維持できるよう支援している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	センター方式の一部を取り入れ、日常の会話で出た思い出話や意向を書き留めたり、介護計画作成時には意識して把握に努めている。担当する職員がセンター方式の用紙に記入し本人の意向や希望に添えるように努力している。	入所前に利用者の自宅を訪問して本人の思いや暮らし方、生活スタイルを把握し、日常の生活に反映できるよう工夫をしている。また、毎日の会話の中で思い出話や意向を書留め個々にファイリングし、職員間で情報共有し、介護計画作成時に本人の意向を聞き取り、計画に立案している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人、家族への聞き取りや、入居前に自宅訪問を行っている。アセスメントを行うなかでその方の生活歴を把握できるよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	職員同士でも気づいたことなど情報交換を行い、心身の状態の把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	カンファレンスやモニタリングを行い、現状に即した支援が行えるよう心掛けている。個別記録や申し送りノート、業務日誌等の日常の記録やまた本人・家族の意見、看護師の意見医師の指導等を参考にして毎月の職員会議でモニタリングを行っている。	現時点での生活課題を引き出すため、モニタリングが毎月行われ、見直されている。介護計画は本人や家族の意向を元に、看護師・介護職の意見や医師の指導書を踏まえ、具体的な支援内容に繋がっている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別記録に残すと共に、会議等を通じて介護計画に反映させている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人の状態や活動の様子など、月1回手紙にして家族に伝えている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の夏祭りや運動会に参加している。その中で心身の力を発揮できる踊りや競技に参加し、楽しんでいる。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医には基本的に看護師が、眼科・整形については、家族に協力して貰うと共に介護士、看護師が通院支援を行っている。	掛りつけ医の受診には看護師が付き添い、できる限り本人・家族の意向に添えるように対応している。毎月、利用者の担当職員が各人の状態や活動時の様子を記録し、医師の療養管理指導書と共に家族に送付している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師が配置されており、介護士との情報交換や病状の把握に努めている。必要であれば受診を行い、情報の共有や支援に当たっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	既往歴や内服薬を記入した個人カルテを作成している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	事業所の代表が、利用者の終末期のあり方についての考えを職員に伝え、実際に今も看取り介護に取り組んでいる。病院での延命治療を望まれない方に対しては、事業所でできる限りのことを尽くしている。尊厳を保つために、清潔を心掛けている。	終末期を事業所で希望する家族には、「GHであるため、延命のための医療行為はできないが、できることは行う」と伝えている。この春も終末期の利用者二人を同時に支援し、点滴施行のための頻回の主治医の往診を受けながら、終末期の方の気持ちに沿った細やかなケアがなされ、家族、民生委員からも評価を受けている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時の対応について意見交換を行っているが、実践力は身につけていない。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	夜間の災害を想定した総合避難訓練を年2回行っている。消防職員からのアドバイスや、運営推進会議にて地域の代表者にもアドバイスを頂き、報告を行っている。	火災発生時は大声で助けを呼び、ベランダに避難し、一人ずつ介助しながら非常階段から避難する予定で近隣には協力要請の同意を得ている。今後は、消防や地域と連携した水害や停電時の取り組みを課題としている。	水害・火災・地震等個々の災害を想定した避難シュミレーション、フローチャート含め、職員が対応しやすい避難方法の統一・共有を図られたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	人格を尊重した言葉遣いを心掛けている。また、トイレは居室ごとに個々にあり、気兼ねなく使用できるが、職員が介助するときにはカーテンを閉めるようにしている。部屋に入るときも声掛けをしている。	職員達は自ら、「笑顔が大事」と穏やかな声掛けを心掛けていた。看取りの方の部屋は本人の呼ぶ声が聞こえるよう、また皆の声や生活が感じられるよう扉を少し開けているが、介助時には閉めてプライバシーの確保に努めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常の会話等の中で意思表示や自己決定ができるよう働きかけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員の仕事の都合で支援するときもあるが、一人一人のペースを大切にするよう心掛けている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	2か月に1回、美容師による散髪に来て頂いている。散髪後は「きれいになった」「さっぱりした」と嬉しそうな様子を見せている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	野菜や果物の皮をむいて切ったり、調理したものを器に入れたりを職員と一緒に実施している。利用者の馴染みの箸や湯飲み、茶碗を使用している。	一人一人の食事の好みを把握しながら献立作りを行い、調理の音や匂いで五感を刺激できるように汁物は共同スペース横の台所で作っている。季節を感じ、食事が喜びとなるよう、季節の物を大切にしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事、水分の摂取量を記入しており、状態に応じ補助食を提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアは、全員必ず行うように支援している。義歯を使用している人は、毎晩ポリデントを使用し、清潔保持に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	各居室にトイレを設置し、気兼ねなくゆったりと排泄できる環境を整えている。職員は一人ひとりの排泄リズムに合わせ、トイレ誘導、トイレ介助を行っている。	尊厳が保たれるよう、各人の排泄間隔に応じた声掛けや誘導を行いながら布パンツで過ごせるように支援している。紙パンツの人を早めに布パンツに変える事で本人と職員の意識が高まり、おむつ外しに成功している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	朝食に牛乳、ヨーグルト、果物など整腸作用のあるものを提供している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	週3日を基本に、入浴日を決めているが、希望者にはその都度入ってもらっている。季節のゆず湯、しょうぶ湯など、色や香りを楽しんで頂く機会も設けている。	入浴は週3回だが希望者にはそれ以上、午前や午後、日によっては夕方にも対応している。看護師も皮膚の状態等が個々に把握できるということで積極的に入浴介助を行っている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	昼寝を好まれる方は、自室に畳風のござを敷き、休息していただいている。ただ長時間昼寝をすることにより、昼夜逆転のおそれがある方については、状況に応じ支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	人の薬のカルテや看護ノートがあり、確認している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人ひとりの趣味や楽しみに触れていただけるよう支援している。家事(洗濯物干し、食器洗い)等、能力に応じ参加してもらっている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	十分できているとは言えない。事業所の前に地蔵や大きな松の木があり、日光浴・散歩には絶好の場所である。普段行けないような場所は、家族に協力して貰って連れて行ってもらっている。	散歩が難しい日は、洗濯物干し用の広いバルコニーに出て外の空気が吸えるようになっている。お花見や、外食、お達者広場への見学や地蔵盆、運動会への参加等年間行事として外出の取り組みを行っている。	事業所が2階にあるという環境上、利用者のある種の違和感に配慮し、当たり前前に外の空気や地面に触れることができるということを意識したケアを目指してほしい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	一部の方については、おこづかいを所持されている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話や手紙の要望があった場合は職員が手助けしている。毎年年賀状を作成し、家族や仲の良かった方へ出している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	清潔感を大切に環境整備(湿度・温度設定含む)を心掛けている。利用者の心理・身体機能の向上も兼ねて、季節を感じて頂けるような作品を利用者と職員で作成し展示している。共用スペースに貼ると、皆さんが喜んでくれる。	食堂を兼ねた居間は、明るく静かで憩いの場となっている。手作りのカレンダーや季節の装飾に彩られて温かい雰囲気の中で利用者が過ごされている。浴室も明るく清潔でじんまりとして使い勝手の良い空間となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	フロアにソファを設置し、いつでもくつろげるよう、ペースを確保している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	各部屋約10畳あるので、ゆったりとテレビ、タンス、冷蔵庫が置ける。テレビが好きな方は、居室で楽しんでいる。以前使用していた思い出の物や好みの物を持って来て頂き居心地よく過ごして頂ける住環境作りに努めている。	入居前に職員が訪問して、馴染みのある生活スタイルを把握理解をした上で、自宅生活の延長の居室造りを手伝い、仏壇やテレビ、竹ラゲや畳と和・洋様々で、個々に居心地の良い居室となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	室の入り口には、表札を掲げている。		